

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word データ送信)

## 【氏名】

佐々木智也

## 【所属】(助成決定時)

東京大学大学院法学政治学研究科

## 【研究題目】

国際政治における外交交渉の役割の再検討

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、戦争や国際危機の場面における外交交渉の役割を検討することである。戦争は国家が武力を背景に他国に何らかの要求を呑ませようとすることで発生する。通常、戦争の開始前には相手国に自らの意思を伝える軍事威嚇や外交交渉が行われ、その交渉が決裂した場合に戦争に至る。国際関係史を振り返れば、外交交渉が戦争回避に決定的な役割を果たすことは明らかである。しかし、国際政治学の理論研究においても外交史研究においても、外交交渉によって戦争を回避するメカニズムが体系的に理解されているとは言い難い。本研究は、近年政治学に応用され始めた手法である計量テキスト分析を用いることで、国家間の軍事的緊張が高まった時期における外交交渉の役割を明らかにすることを旨とする。以上の学問的貢献に加えて、本研究は政策形成に繋がる点として、戦争と平和の条件を外交交渉の有する役割から分析することで、東アジア及び国際社会の緊張緩和に繋がる視点を提供することを目的とする。(419字)

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では国際危機に至る前に観察される外交交渉の役割及び影響を分析した。特に、「軍事威嚇を用いた場合と外交交渉を用いた場合とで、国際危機の帰結に相違が生まれるか」「相手国から軍事威嚇と外交的手段によるアプローチを受けた際に、相手国への認識はどのように変化するか」という問いを主に検討した。

国際危機の理論において、戦争回避のためには、当事国の間で武力行使についての政治的意志や軍事的能力に関する信憑性の高い情報が共有されていることが重要だとされる。公然化された軍事威嚇は、武力行使へのコミットメントを自国民に対して確立することで、その政策を撤回することによる国内政治コスト(観衆費用)を高めるため(自己拘束メカニズム)、相手国に信憑性の高い情報を伝達することが可能とされる(=戦争が回避されやすい)。他方、外交交渉は、国民の目からは見えにくく観衆費用による自己拘束メカニズムが発動しにくいいため、信憑性の高い情報共有が難しいが、譲歩した場合の国内政治コストが低いため、譲歩が比較的容易である(=戦争が回避されやすい)。

本研究では、上記の問いとメカニズムを背景に、1950年代半ばから1960年代半ばまでの米ソ関係、太平洋戦争開始前の日米交渉を研究対象として、外交文書を用いた計量テキスト分析を用いた実証分析を行っている。この二つを実証分析の事例とした理由は、前者が戦争回避に成功し後者が戦争に至ったこと、外交交渉と軍事威嚇を織り交ぜていたこと、相手国への認識などを推定するための外交文書がデータとして獲得できることの三点である。相手国への認識や国際危機の帰結に関するデータとしては、アメリカ合衆国国務省が刊行している The Foreign Relations of the United States を、軍事威嚇に関するデータとしては The Conflict and Peace Data Bank を用いた。本研究では、政治学における計量テキスト分析を発展させ、分析そのものを洗練化させるために、計量テキスト分析の新たな手法を開発した。具体的には、文書内で登場する話題がどのように変化したのか、その変化が何に起因したのかを識別するための統計的手法を提案し、その手法を外交文書に適用した。(874語)

【結論・考察】（４００字程度）

本研究において現在のところ得られた知見は以下の通りである。第一に、1950年代半ばから1960年代半ばにかけて、アメリカは、ソ連の軍事力行使の意思を検討する際に、ソ連からの軍事威嚇よりも外交的手段によって入手された情報を重視していたという結果が得られた。この結果は、相手国への認識を更新する上で、相手国からの軍事威嚇（軍事動員）よりも、公にされない外交的やり取りの方が重要であることが示唆される。第二に、1950年代半ばから1960年代半ばからの米ソ関係、太平洋戦争前の日米関係を比較した際に、外交交渉と軍事威嚇とで国際危機のエスカレーションに与える影響に差がないという結果が見られた。この分析についてはさらなる考察を必要とするが、戦争回避の手段として軍事威嚇を重視し、外交交渉を軽視する先行研究とは一線を画す結果である。以上、二つの分析は、先行研究が軽視してきた外交交渉にも国際危機における戦争回避に一定の役割を果たしうることを示唆する。

今後は、Hoover Instituteにて、助成期間内で行った事前調査を基に文書を追加で収集して分析に活用し、新たな知見を得ることを検討している。（468字）